

五月の「正信偈」の講座を迎えることができまして、有難いご縁に遇わせていただきましたことを、心から感謝申し上げます。三月の時には、このテキストの七頁、「本願名号正定業」の一句について学ばせていただきました。今日は「至心信楽願為因」の一句について学ばせていただきたいと思います。

本願名号正定業 至心信楽願為因

この南無阿弥陀仏の名号こそ真実の言葉となって
人が生きて往く道を正しく定めるはたらきをします。
み名に込められた、真実に目覚ませようとお心が、
私たちのいのちの根源にはたらきかけ、呼び覚ますのです。

成等覚證大涅槃 必至滅度願成就

だれもが平等ないのちの尊さに目覚めて、
真のさとりの世界に帰することができるのは、
必ずさとりに至らせよう、という
阿弥陀の願いが成就しているからです。

「正信偈」に親しむことができるのは、真宗門徒に与えられた大いなる幸せであります。それは何も真宗門徒に限らず、あらゆる人々に呼びかけられ、また遇うことのできるお勤めであります。

あっという間に寒い冬も終わって新緑の五月になりました。先程、ご住職様のご導師のもとで皆様方とお勤めさせていただきました。大変素晴らしいことだな、ということを感じました。

それは、九十年のご生涯をかけて本当に大切な真実の仏法に出遇われて、一番救われた方が親鸞聖人ですよね。こんなに尊い仏道の伝統があるということに非常に深い感動、喜び、恩徳ということを感じられた。人間の抱えておる真っ暗闇の底の底まで至り届き、照らさずにはおかない。苦悩の只中であってしかも迷いを超えて生きる。そういう人々に呼びかけられておるのがお念仏のおみのりであり、本願のご苦勞であるという。特に第十八願、第十九願、第二十願に渡って十方衆生と呼びかけて、一人も漏らさず救い遂げなければ、仏とはならないという誓いを述べておられます。

◎第十八願◎

たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信楽して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。

◎第十九願◎

たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、心を至し願を發して我が国に生まれんと欲わん。寿終わる時に臨んで、たとい大衆と圍繞してその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。

◎第二十願◎

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取ら

じ。

その十方衆生という言葉について親鸞自身は、十方のよろずの衆生であると。十方というのは東西南北四維上下という全方位ですね。よろずの衆生ということはあるとあらゆる衆生である。我等なりという。我等というのはそこに親鸞自らがおられるのです。我等という所には、共に生きておる人々がある。

先程お話が始まります前に戦争の話が出まして、嬉しいことにオバマさんがG7で来られた時に、広島にお参りくださるということが決定したようであります。率直な感想を言えば、やっとかという。現職の大統領が来られるまで七十年もかかるのですね。昭和二十年の原爆が広島に落下された時に、七十年間草が生えないだろうと、新聞で報ぜられたことが印象に残っております。今、その七十年ということですね、浮かんできました。

草は確かに生えたけども、原爆を落とされて、悲惨な惨状があそこにはあるわけですよ。老いも若きも男も女も、文句を言わず一発の原爆で殺すのですからね。そしてアメリカの人たちは落とさなければならなかったのだという、そういう理由付けを一生懸命しておられますが。体制から言えばもう敗北ということは明らかであったと思うのです。勿論日本の国の中では、最後の一人まで戦うのだということ信じ込まされていまして。当時私はまだ小学校四年生。人間の世界というのは凄いですね、信じ込ませるといふことがある。

その時ね、日本人にとってアメリカ人は同じ人間じゃないのですよ。鬼畜米英なのです。人間じゃないのですよ。これが戦争の事実じゃないですか。人間が人間を放棄して、鬼畜になっているわけですよ。鬼畜だと言っている自分が鬼畜になっていることを言わないで、相手が鬼畜だと。そこには我等の感覚がなく、彼等を抹殺しなければ平和はないと、こうなるわけですよ。

論理ははっきりしているのです。はっきりしているのだけれども、自分自身の中に、己良しとして自是他非をする。是というのは是認する。他非というのは、他を批判するのです。あいつは人間じゃないと言っているあなたはどうか、ということになると、中々問われない。そういう状況に置かれたら、その人以上のことをするかもわからない。人間は自分自身を問うということが非常に苦手です。無意識の内に拒否をしているのではないかと思います。相手の欠点を見つけて、非難して責めて、それによって己良しとする。そういったことは無意識の内に働いているのではないかと思えてならないのですが、どうでしょうか。私はそういうことが人間の一つの資質の中にあると思われてなりません。

この一番初めのところに、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。この現代語訳では、生きとし生けるものを喚び覚ましてやまないという言葉を出ささせていただきました。生きとし生けるものということは人間だけではありません。人間中心の地球ではありませんよということです。いつの間にか人間中心になって、地球があたかも人間のものであるかのごとく振る舞っていますけれども、そんなものでしょうか。

人間自身がいかに生きとし生けるものに育てられているかという、そういう眼を欠落させると何をやるかわかりませんよ。原爆や水爆を作って、最高の文明の利器を使って人間を殺そうというのですよ。文句言わずにね。その時に初め申しました、原爆が落ちたら七十年間草木一本も生えないと。そう報じられたことがあるのです。不毛地帯です。不毛地帯を作る因が人間にある。このことを忘れてはならないと思います。大量殺人兵器を作り、たくさんのお金を使い、それで正当であると。

中々人間というのは自分自身を見つめることが苦手というか。見つめたくない、拒否するといふことがある。そういうものが非常に深い存在だと思います。やはり親鸞聖人ご自身があの時代の中

でそういう問題を感じたのでしょうか。本当に如来様自身が人々と命を共にし、悲しみを共にし、苦しみを共にしてくださるといことは、なんとまあ大きな出来事であるかという感動を持って、「正信念仏偈」を歌われたと。その歌を今、私たちが一緒にこうしてお勤めすることができるということは、大きな喜びであります。そういうことをね、知らされるのであります。

私たちが仏法に遇う時に、戦争なら戦争ということに対して教えられることは、正義の戦争をして相手を殺して平和を実現するなんて、そんなものじゃないということです。これはどうしても人間から言うと理想に聞こえるかもしれませんが、非戦平和。聖戦という呼び方もありますけど、やっぱりこれは人間の正義が我にありという。人間というものを本当に尊重できない。声を聞くことができない。声を聞かないのですよ。聞こうとしないのですよ。

だから人間がもし法を聞くという生き方を忘れたら人間でなくなると。それ程の意味があると思います。家庭の中でも、夫婦や親子の関係、友達関係であっても、相手の声を本当に聞かずして、あんたこういうものだろうと、押し付けるということがありますよね。聞くということは大変なことですよ。そういう聞くという大事な営みが、命の一番深い所から、人間の自我意識を破って、聞かずにはおれないというそういう意欲がね、湧いてくる。

これは人間の意欲と言うよりも仏様の意欲ですね。その時初めて人間が人間になる。悲しいならば、その悲しみを共感するという。だから我等という言葉はね、本当に大事ですよ。テロが起こるには起こるだけの一つのいわれがあるのだろうと、こじつけもあるかもしれませんが。しかしテロは決して正しい方法ではありません。何故ならば文句を言わずに命を抹殺するから。言葉を断絶するわけですよ。言葉は命と言われます。そこでは話し合い、聞き合うということがなくなるわけですよ。そういうことに気付くというのは正信念仏。まことの信心ですね。人間をして人間たらしめるようなそういう真実の信心に目覚めるということが根本であるという、そういう大事なことを親鸞聖人は歌い上げてくださっておる。

私は、農家の生まれであります。農家の生活は、汗して、真っ黒になって働いてということがあります。稲が育ってくれるからということがあるわけですよ。私たちが命を養っていく上にはやっぱり自然の命、大きなはたらきなくしては存在しえないと。人間中心主義であるならばね、やっぱりそういう大自然の恩恵ということをともしれば忘れてしまう。

もっと言えばね、日常生活の中で私たちが毎日いただいている一杯の飯の一匙のスプーンですくうそのスープの味が違うのですよ。それはやっぱり本当に量り知れない人々の、量り知れない努力によって命をいただいております。自分の所にまで運ばれてきた飯であり、スープであり、おかずであるということを知るのと知らないのではね、大違いじゃないでしょうか。

例えば子どもが育ってやっと仕事に就いてお父さんお母さんにマフラーの一本でも、とプレゼントしてくださると。そのマフラーが一万円したか五百円したかそういう金額の問題じゃなくて、ああ働いてやっとマフラーをプレゼントしてくれたなという、その子どもの苦勞を思い、心を思えばね、高い安いじゃなくして、やっぱり有難いと。そういうことに満ち満ちるということですね。

仏法の中で満足自体という言葉があります。これはいわゆる自己満足ではありません。自分が自分であることに、かけがえのない尊さを感じるとい。やっぱり尊厳性ですね。尊厳と言うような言葉は現代では使わなくなっているのかもわかりませんが、それは一つの貧困の表れだと思います。尊というのとは尊いということでしょう。厳というのとは厳粛な事実。例えば貧しくて、姿、形は貧弱であっても、命をいただいております。生きておるとい。尊厳な事実ではありませんか。本願のおみのに遇うとき、はっきりと教えられると。そういうことがはっきりしないとね、どうしてもね、力があるかないか金があるかないか。そういった付属の条件に、引きずり回されるのです。問題は存在する者自身。

明治におられました清沢満之という方が、若い人たちが今の時代状況や色んなことを批判して嘆くことに触れて、先生が言われた言葉は、「あなた方よ、何事も須らく自己一心に引き当てて考えきたれ」と。ただ人様を非難しているだけでは話にならないと。その中にあって自分自身はどう感じ、どう問題にして生きているか。

聞法というのは他人様のことを他人事として云々するものではありません。どんなに他人事のように言われていても、それに触れた者は、あなたはどうかと。自己一心に引き当てて、考えきたれと。あなたはどうかと。

後ろの軸に御門主様が書かれた掛け軸があります。これは仏陀釈尊の言葉でありますけれども、汝自当知。汝自ら当に知るべしという。汝というのは仏様から呼びかけられているのです。汝というのは誰ですか。あなたですよ。あなたというのはどこにいるのですか、ここにいるのですよ。私がおなたと呼ばれているのです。私がおなたと呼ばれているということに気が付かないならば、他人事になってしまうということだと思います。やっぱり引き当ててというところに、本当に自覚という目覚め。これが引き起こされてくる。こういう意味が教えられることでございます。

こうして私たちが「正信偈」を学ばせていただくということは、私たち人間存在にとって非常に大きなことであると思います。宗祖親鸞様から共に聞法しようではありませんかという声が聞こえるような。そういうこの生き生きとした脈があるわけですよ。とつとつと心臓が動いているように、教えの言葉に遇うということは、この命が、大地から湧き上がってくるという、そういう大きな恩恵というものをいただくのであるということが言えるかと思えます。

今日はですね、「至心信樂願為因」という一句についてと思うのでありますけれども。先程拝読いたしました、「本願名号正定業 至心信樂願為因 成等覚證大涅槃 必至滅度願成就」というこの二行四句はですね、本願の行信。私たちが生きていく上で、人間の生きる要になる教えですね。何故、本願のという言葉がつくかという、それが抜けると人間の行信になるわけですよ。私がしてやったというね、そういう人間の自力。相対有限な絶えず人間の無意識の中にまで働いている価値観の奴隷になってしまうという、そういうことを破る。本願のというところには人間のそういう相対有限を超えた、無限と有限という大きな質の違いがあるわけですよ。これは無限なるものに触れるということ、これは大変なことですよ。

私たちのこの命は限りある身体であるけれども、その人間一人が実は大なる無限なる命のはたらきの中に生かされてある我が身であるということに気が付くのと気が付かないのではもう大違いです。これはやっぱり命を私有化するとね、なんとつまらない。しかし絶対無限というはたらきに気が付くとね、この命は自分のものではないという。これは中々並大抵じゃないのですよ。やっぱり辛いことがあったり息詰まったりすると、死んでしまった方がいいかなというね。

人間というのは、いかに人間中心で脆弱で頼りにならないものであるなということがある。そこに本願の行信という、絶対に揺るがない、生きとし生けるもの、あらゆる存在を包み支え、生かして生きておる絶対無限のはたらき。如来の本願力に依るのであると。そういう依り処がね、非常にはっきりすると。これはもう人生においては大問題ですね。そういう依り処について、親鸞聖人ご自身が『教行信証』の中で後序のところにありますように、

しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願に帰す。

(真宗

聖典三九九頁)

雑行というのは人間の自力の、ああすればいいこうすればいいと思って努力するわけです。そう

いうものを頼りにするという有り方を棄てて、本願に帰すと。自力の心を棄てて本願に帰すという。逆に言えば本願に遇うということはああ雑行雑種の中にいるのだと、それに捉われているのだということに気が付くわけですよ。今の言い方をすれば、見えてくるわけですね。人間が自分の姿が見えてくる。

だから歳を重ねていくということは肉体的にも精神的にも色んなことが起こってきます。しかしそれは決定的な意味じゃなくして、ただいておる命の歩みが御縁となって見えてくる。歩ける、見える、人の話を聞ける、食べられる、排泄する、何をとってもね、当り前でも当然でもないのですよ。やっぱり大いなる恩恵ですね。大いなる恩恵の中にある。もう既にその恩恵をこの身にいただいている。いただいているのだけど、気が付かない。そういうことが生活と共に絶えず新しく知らされてくる。

最後の最後まで恩恵の中にあると思うのですよ。例えば身体一つでベッドに横たえるようなことになったとしても、ベッドがあり、着るものも与えられ、食べるものも与えられる。本当に裸一貫の身がね、支えられる。ある意味では多くのものを失う歩みにおいて、どれ程大きなものが与えられているかということに出遇っていく。やはり私は命のある限り、呼吸のある限り、出遇い続けていく人生だなと思います。

そういうことを親鸞聖人は非常に深く感動され、そして仏陀釈尊の恩、七高僧の恩、量り知れない恩徳を感じられて、『教行信証』を表され、「正信偈」を表されていったと。だから私たちは「正信偈」をいただくことにおいて、親鸞から言えば、おお友よと。そう呼びかけられているのではないですか。御同朋御同行よと。そういう非常に親しい出遇いというものが今の時代の中で開かれておる。生き生きとした命の脈動。脈打ってはたらく。そういう意味では感動があるわけですよ。感動があるということは同時に悲しみがあるのですよ。そういうことを忘れてしまうということがある。自分の中にはたらいておりながら気が付いていけないというようなことがある。そういうことに対する悲しみがある。その悲しみを知ればそういう身にはたらいている喜びを感じず。

これは素晴らしい言葉ですが、悲喜交流という。悲しみと喜びとが交流すると。病気になって辛い思いをして泣くということを通して、健康というのはこんなにも有難いことなのかと。幸いにも家族がいて、友達がいて、見舞ってくれるという、支えてくれるという、そういう有難さに出遇うわけですね。だからそこは私たちのいただいている命というものは、なんとまあ深い、尊い意味を持っておるか。

歌というのは感動の表現です。感動の表現なのです。歌わずにはおれないのです。出遇ってこの身に生きて脈々とはたらいている脈動している、そういうものを歌として歌い上げられた。それは十方衆生の皆様方と一緒に歌おうではありませんかとね。それは二十一世紀の今を生きている私たちに響いてくるわけです。時代を超えてね。だから南無阿弥陀仏に遇えば過去も現在し、未来も現在するという。そういう大きな世界が開かれてくる。

「本願名号正定業 至心信樂願為因 成等覚證大涅槃 必至滅度願成就」ということは如来の本願の名号の大いなるはたらきに遇って、真実信心に目覚めるとい、そういう人間にとって最も大切なことが起こってくる。この人生を迷いで果てるのではなくして、必ず仏になるという、そういう大いなる目覚めの生活、現実生活をいただき、必ず大涅槃に至ると。そういう大いなる人生が開かれるのであります。

人間とは何か、人生とは何かということについてね、本願の名号は正定の業です。至心信樂の願が本当に目覚めていく、仏様となっていく、根本の原因、種であります。等覚となり、仏陀と等しい目覚めをいただいて、大涅槃を證する。必至滅度の願成就と。必ず現生に正定聚に住せしめして、滅度に至らしめずんばやまない。滅度というのは大涅槃ですね。大涅槃というのはありとあらゆる

迷いを根本的に超えて、すべての命あるものを、目覚ましめるべくはたらく。大涅槃という言葉には私たちはもう既に親しんでいるのですよ。お浄土というね。お浄土は大涅槃の世界なのです。

親鸞聖人は光明無量寿命無量と。釈尊が『大経』を説かれた、その四十八願の中で光明無量寿命無量。光明というのは光、智慧ですね。深い慈しみと悲しみに支えられて生きておる。人間は、悪いのは他人である、世の中であるというふうに責任転嫁するわけですね。責任転嫁する名人です。

今、東京都知事さんが問題になっています。頭も良いし、世渡りも巧なんでしょうけれども、言葉を聞いていると責任転嫁がうまいなあというようなそういうことを感じてならない。そういう責任転嫁は一人知事さんだけじゃないのですよね。汝、お前はどうかと言われるとね。私の中にあると。そういうことが教えられるのです。私の中に、そういう闇を抱えています。闇という感覚は光に遇った感覚なのです。光を感じないということがないと闇という感覚はないのです。光に触れて初めてああ闇だったと。私は立派な人間だと思っていたけれど、そうじゃなかったと。自分のことしか考えていなかったと。これは自分を越えた大きなはたらきに触れて、そういうことを教えられるわけですね。

至心信樂の願というのは阿弥陀の四十八願の中の第十八願です。念仏往生の願と呼ばれていたものを、親鸞聖人は至心信樂の願という、信心を表す願だということをはっきりと言い表されていった。これが第十八願の願文です。

説我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念。若不生者、不取正覺。唯除五逆、誹謗正法。

たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。

十方の衆生が至心に信樂して我が国に生まれんと欲えと。我が国というのは浄土の世界ですね。乃至十念せん。至心に信樂して我が国に生まれんと欲うて、念仏を称えられた。それによって若不生者。もし生まれないということがあるならば、私は正覺を取らないと。阿弥陀仏とはならないという誓いなのです。十方の衆生は、まことの信心に目覚めて浄土に生まれ往くという。そして念仏するということによって目覚めないならば、私は正覺を取らないと、こう誓われる。

その最後に唯、五逆と正法を誹謗せんをば除かんと。五逆というのは、これも生々しい。父を殺し、母を殺すとか、道を求めるものを殺すとかね。和合僧。僧伽の世界を破るわけですよ。和合僧を破るといのは生々しいのですよ。自分の都合の良いような理屈を付けて、あんたそれでもいいのかと。本当はこうだといってね、都合のいいことをいって、破るのですよ。『歎異抄』の異議編ね。あれは和合僧を破るといふうな。我が弟子、人の弟子の取り合いの世界になる。これは和合僧なのです。人間というのは嫉妬深いしね、人様の喜びを中々共に喜ぶということはできない存在だと思うのですが。中々和合僧を破るといふ問題はきついですよ。

例えて言えばね、自分の家庭は何か問題があって暗いということが仮にあったとして、隣の家は家族の笑い声が絶えないと。ああ良い家族だなと思っても妬ましくなる。その家族の平和が乱れるとね、ざまあみろというような。言葉では言わないけど。何故私がこういうことを敢えて言うかと申しますと、それほどこまでも生身の人間の、私たちの中にある問題に光が当たっているということなのです。十方衆生の問題であるが故に、同時にそれは私自身の問題であると。

父を殺し、母を殺すということも肉体を殺すということもありますが、こんな人間に産んでくれと頼んだ覚えはないと思うことがありますね。私はありました。これは殺していることと同じなのです。親を蔑ろにするということは殺しているのと同じでしょ。今、日常的に行われていること

で言えば、無視するということがある。無視するというのはきついですよね、無関心もきつい。声をかけて意見を交換できるのはいいけれども、無視とか無関心というのは非常にきついわけですが。そういうものを孕んでいる。正法を誹謗すると。

これはね、親鸞聖人の但し書きで言われているのですが、至心信樂欲生ということは皆、如来の真実の信心に促されて念仏申すということが私たちの上に起こると。それによって本当にもし生まれなければ、浄土が開かれないならば、私は正覚を取らないと。そこに五逆と正法を誹謗するもの。正法というのは真実の教えである本願を誹謗するものですね。それを除くと。この除くという言葉がね、十方衆生を救うと言いながら、五逆と正法を誹謗する者は除くというのは、言葉の上では矛盾しているわけですよ。このことをね、親鸞聖人は非常に深く、問われて悩まれて、そして注釈されておる。

五逆と誹謗正法の、罪の重いことを知らしめして、皆もれず、摂め取ろうと知らせんとなりと。唯除ということについて唯、除くということについて、もうこれはね、青天の霹靂というような。本当にここまでね、よくぞよくぞ明らかにしてくださったという。五逆と誹謗正法の罪がどれ程重いかということ、教えてくださって、知らしてくださって、十方の衆生、一人も漏らさず、救い遂げようというそういうお心を、表現されたものでありますと。

よく唯除の文という言葉が聞かれると思いますが、唯除。唯、除く。また抑止文と言われます。五逆と正法を誹謗するものは救われませんよと。除きますよと表面的に言われていますよ。その心の底は、五逆と誹謗正法ということはいかに罪が重いか、深いかと。

あまり日常的に言い過ぎるとそんなの仏法を聞いてなんの足しになりますかと。金が入りますかと。そんなこと言うならばね、ここで誹謗正法なのですよ。仏法のことを知りもしないで自分に引き当てて考えもしないで。仏法を一番聞かなければならないのは誰ですか。本当に仏法を聞かずにはおれないのは誰なのですか。誰ですか。人様ですか。自分自身でしょ。私自身が聞かずに、どんなことがあっても聞かずにはおれない存在なのだと。そういうことをね、はっきり教えてくださるわけですよ。だから唯除の文ということは非常に大事でね。そこにまさに如来の大悲がね、躍動しているわけですね。

この第十八願の願文についても親鸞聖人の非常に丁寧な了解はですね、『尊号真像銘文』の一番初めのところに懇切に記されておりますので、『真宗聖典』の五一三頁ですが、

「唯除五逆 誹謗正法」というのは、唯除というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。

(真宗

聖典五一三頁)

とがというのは罪ですね。だから唯除の文を置かれるということにおいて、そのふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。そこまで徹底しておるのですよ。私自身が唯除される存在であるということに気が付く。それは五逆と誹謗正法の身であると気が付くとき、なんとまあ自分は浅ましく愚かな者であるかと。罪の深いものであるかと。その愚かな浅ましい罪の深いものを、捨てることなく、この身が助からなければ、如来は如来とならないと誓われておるのである。如来の大悲心に触れてね、本当に私たちは生きる道を存在の絶対的に尊いという意味をね、教えられる。

それから『尊号真像銘文』も、「正信偈」の大事な言葉につきましてね、

聖典五三〇頁)

という言葉が言われまして、「本願名号正定業」という言葉が引かれているのであります。ご自分がお作りになった「正信偈」について、本当に大事なことだということで名乗られた。「正信偈」の文を出されて了解を述べておられます。それはね、私事じゃないのですよ。こんな尊い大いなるものに出遇うことができたというその感動喜びを、人々と共にいただいでいきたいという、そういうものがこう奥底に脈打っておられるわけですね。

「本願名号正定業」というのは、選択本願の行というなり。南無阿弥陀仏の念仏であると。不必要なものは選び捨て、本当に人間が目覚めるということにおいて、なくてはならない大切なものを選び取る。それは選択本願の行。南無阿弥陀仏の念仏なのです。

「至心信楽願為因」というのは、弥陀如来回向の真実信心なりと。至心信楽欲生我国という言葉は、如来が私たちに回向を与えてくださった。表現してくださった。私たちの中から如来の真実心に目覚めよと、気付けよと、表現してくださった。私たちの中に至心信楽欲生という本願の三心と言われますが、それを起こるけれども、私の心ではない。如来の心が私の上に起こったのであると。如来の真実の心に触ればこそ、私には真実の心がなかったという。虚仮不実の我が身であるという自覚が与えられる。虚仮不実の我が身であるということは如来の真実に触ればこそ虚仮不実の我が身という自覚が与えられますね。親鸞聖人はそういうことをはっきりとね、表現して下さっておるのですよ。

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし

(真宗聖

典五〇八頁)

清らかな心は更になかったと。こうはっきり親鸞聖人が悲しみ嘆かれて歌にされたということは、同時に如来の真実信心に触ればこそ、清浄の心もさらになしと。虚仮不実のわが身にてということがはっきり言われたのです。だから虚仮不実のわが身という懺悔は、如来真実に触れた讃嘆が懺悔となって表現されているという、そういう意味があるわけです。

まあよくもよくもこんなつまらない亭主の為にあんたは生涯をかけてお世話くださったねと。ありがとうねと。もし言えるならば大変なことじゃないですか。俺みたいな凄惨な奴に出遇ってお前は幸せだろうと。それを幸せだと思えないようでは、お前は人間ではないと。もしそうなら、いかにも高慢ですね。何故かならば奥さんが作ってくださるご飯を食べて、垢で汚れた洋服を洗濯してくださった。そういういっぱいお世話になっておりながら、己一人の力でね、養っているような。しかし人間にはそういうことが起こるのですよ。浅ましいですな、愚かですな、悲しいですな。そういうことをね、人間が生きるという問題をね、一番深い所にある。一番深い所。そういう人間が抱えておる問題は一番深い所まで、依り処の所まで、はっきりと教えてくださる。

如来が私たちに誓って下さっております真実の信心こそが目覚めていく因。原因であると。種であるというそのことをはっきりと教えて下さっておる。因をね、明らかにして下さるという

のは本当に大事なことです。本当に目覚めていく因はなにかというと、信心である。涅槃の真因はただ信心である。本当に目覚めていくまさしき種は、ただ信心一つである。これはもうね、画期的というかね、非常に大胆で率直な教えですね。『歎異抄』の中にあるでしょ。ただ信心を要とすとしるべしと。信心こそが要であると。

私たちが生きていくということにおいて存在自身が如来の大いなる信頼の中にあるということ一つに気が付かなければ、やっぱり存在の立脚地を失うのです。世間的な価値観とかね。無上なものに頼るといものを見つけようとしてしまうということがある。そういう点では世間的な名利心とか、損得ということが、あたかも人間の生き甲斐であるかのごとく、それに取り込まれてしまうということがあるわけです。

生きておること、命をいただいて呼吸をしていることそのこと自体が尊いと。如来の大いなる信頼の中にあるということは大事業です。なかなか気付くことは困難である。しかしそのことに気が付かなければ、本当の安定、安らぎは得られないというふうに思います。

このことをね、これは前にも紹介いたしました、念仏詩を書いておられます、木村無相さんという方がこういう詩を作っておられるのですね。

「至心」

至心というも如来のまこと
信樂というも如来のまこと
欲生というも如来のまこと
まことの結晶
南無阿弥陀仏
三心十念

三心というのは至心信樂欲生の三心です。十念というのは念仏を十念してという。三心十念、南無阿弥陀仏と。南無阿弥陀仏というのは「本願名号正定業」でしょ。南無阿弥陀仏のことです。だから木村無相さんという方はもう聞法ということの一つにね、生涯をかけて生きられた方なのです。人間生活では地獄の経験ということを何度もしておられるのですよ。お父さんが大工さんの棟梁かなんかやっておられて、これ（女性）が非常に好きでね。愛欲の嵐のような。そういうものを眺められて。その中から本当に生きようとなさって、高野山で修行をされたり、山科の一燈園にいらしたり。

私は木村無相さんの名前を初めて聞いたのは京都の一燈園でしばらくお世話になった時に、今日は木村無相さんが来られるのだということを当番さんが嬉しそうに話しておられたのが印象に残っております。もう生活をかけてね、聞法された。その木村無相さんが、東本願寺の同朋会館の門屋さんをしておられた時期があるのですよ。優しい、本当になんとも言えないお姿をしておられたのです。

やっぱり地獄の人間生活の中から深いご縁を得て、念仏に出遇われた。だからこの第十八願の心というものも、本当に深く受け止めておられる。木村無相さんの日常生活を歌った中ではね、御恩という詩がある。

「御恩」

ああ手の御恩
足の御恩

五体をあげて皆御恩
一生お世話になります
煩惱熾盛の私とて
いかいご苦勞をかけます
ああ手の御恩
足の御恩

煩惱熾盛というのは煩惱が燃え盛るように盛ん。いかいというのは大きな。これはね、私たちが生活して生きれば生きるほどね、そうだなということが身に沁みってくる念仏詩ですね。自殺しようと思われて、自殺されかかったことも何度もおありのようでありますけれども、深いご縁で生きることができて。そしてその親鸞聖人の教えの尊さに出遇っていかれたというこういう方ですね。

「間違い」
助かる身になって
助かろうとする
それは間違い
助からぬ身を
助くるのご誓願
助からぬ身に
南無阿弥陀仏

これも凄いですね。助かる身になって、助かろうとする。大抵は善人になって、少しでも善い人になってと言われてね、それで助かっていこうとする。おかげさんでこの頃、煩惱が少なくなりましたと。煩惱が少なくなりましたと言って誉めてもらいたいのでしょ。煩惱じゃないですか。ごまかされるのですね、人間はね。カッコいい言葉にね。唯除五逆誹謗正法ということが、響いておるわけですよ。

時間がたっておりますので、今日はこれで終わらせていただきまして、後の時間は感想とか、質問とかあれば、提起してくだされば有難く思います。ご静聴くださいましてありがとうございました。